



がん患者の晩期有害事象への看護ケア構築

保健福祉学部 看護学科
助教 安田千香（やすだちか）

連絡先 県立広島大学 三原キャンパス 3410 号室
Tel&FAX : 0848-60-1188
E-mail cyasuda@pu-hiroshima.ac.jp

専門分野： 在宅看護・統合, がん看護

キーワード： がん化学療法, 放射線治療, 晩期有害事象,
生活支援

● 現在の研究について

がん患者の QOL 維持・向上を目指し、看護ケアのエビデンスと臨床に適応できる看護ケアの構築に向けて研究活動を行っています。

1. 抗がん剤による末梢神経障害への看護ケア

抗がん剤による四肢のしびれや違和感、痛みを末梢神経障害といいます。末梢神経障害患者は、服や靴の着脱、車や自転車の運転、書字動作、箸の動作を困難に感じています。医療者が患者の末梢神経障害に気付いた時には症状が重篤化していることは珍しくありません。抗がん剤による末梢神経障害の客観的評価に適した指標がないため、患者の主観に頼らざるを得ない現状にあります。そこで、私は末梢神経障害の客観的評価方法を確立することを目指し、研究に取り組んでいます。

2. 放射線治療を受けた頭頸部がん患者への看護ケア

放射線治療終了後6か月以上経ってから出現する有害事象を晩期有害事象といいます。頭頸部がん患者の中には、筋肉の石灰化や関節の拘縮から開口障害を発症する人も少なくありません。開口障害は会話、食事を困難にし、人とのコミュニケーションや生活に直接影響を及ぼします。したがって、開口障害への看護ケアとしてリハビリテーションプログラムの構築を目指しています。

● 今後進めていきたい研究について

現在、がん治療は医療技術の発展、入院期間の短縮化に伴い、外来にシフトされています。これにより、治療による有害事象の対処が患者や家族に求められ、患者と家族のセルフケア能力が外来治療を継続するための要となります。したがって、看護師にはセルフケア指導や退院支援の能力が今まで以上に必要になっています。よって、今後は在宅で療養するがん患者が安心して過ごせる在宅医療や在宅看護を目指し、患者と家族のセルフケア支援に関する研究に取り組む予定です。

● 地域・社会と連携して進めたい内容

高齢化が進む我が国では、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で人生の最期まで自分らしく暮らし続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムが動き出しています。三原や尾道地域で暮らすがん患者の生活支援がますます充実するよう、地域の医療機関やボランティア団体と積極的に関わりたいと思っています。